

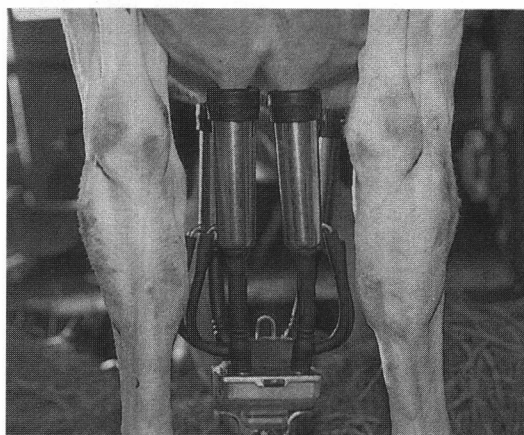
黄色ブドウ球菌を知ってやっつけよう

乳房炎はその原因菌によって、症状、治療方法、予防対策などが異なります。中でも黄色ブドウ球菌による乳房炎は、伝染性の乳房炎であって、一度感染するとなかなか治らないという特徴を持ちます。このやっかいな黄色ブドウ球菌について、その特徴と対策を紹介します。

1. 黄色ブドウ球菌の特徴

ブドウ球菌は常在菌と言われ、子宮・膣、内部生殖器、皮膚など牛の周りに広く分布しています。乳房炎の他にも子宮内膜炎や膀胱炎などの炎症をおこす菌としても知られています。ブドウ球菌の中でも黄色ブドウ球菌は、溶血性（赤血球を壊す性質）と強い毒性を持つことが大きな特徴です。

黄色ブドウ球菌の感染源は乳汁、乳腺、乳頭、さらには乳頭の傷やただれなどで、搾乳器具や搾乳者によって伝染することも特徴です。



2. 黄色ブドウ球菌による乳房炎の特徴

黄色ブドウ球菌が原因になる乳房炎には次のような特徴があります。

- 潜在性乳房炎、臨床型乳房炎のどちらにもなる
- 臨床型乳房炎の場合はエソ性の乳房炎となり、その強い毒性によって牛が死亡する場合もある
- 乳腺内に病巣を作り、しこりとなることが多く乳房内に小さな膿瘍を形成することがある
- 乳腺奥深く入り込むため抗生物質が届きにくく、治癒しにくいので慢性化する
- 搾乳中にミルクカーや搾乳者の手などから伝染するので、蔓延し経済的損失が大きくなる。

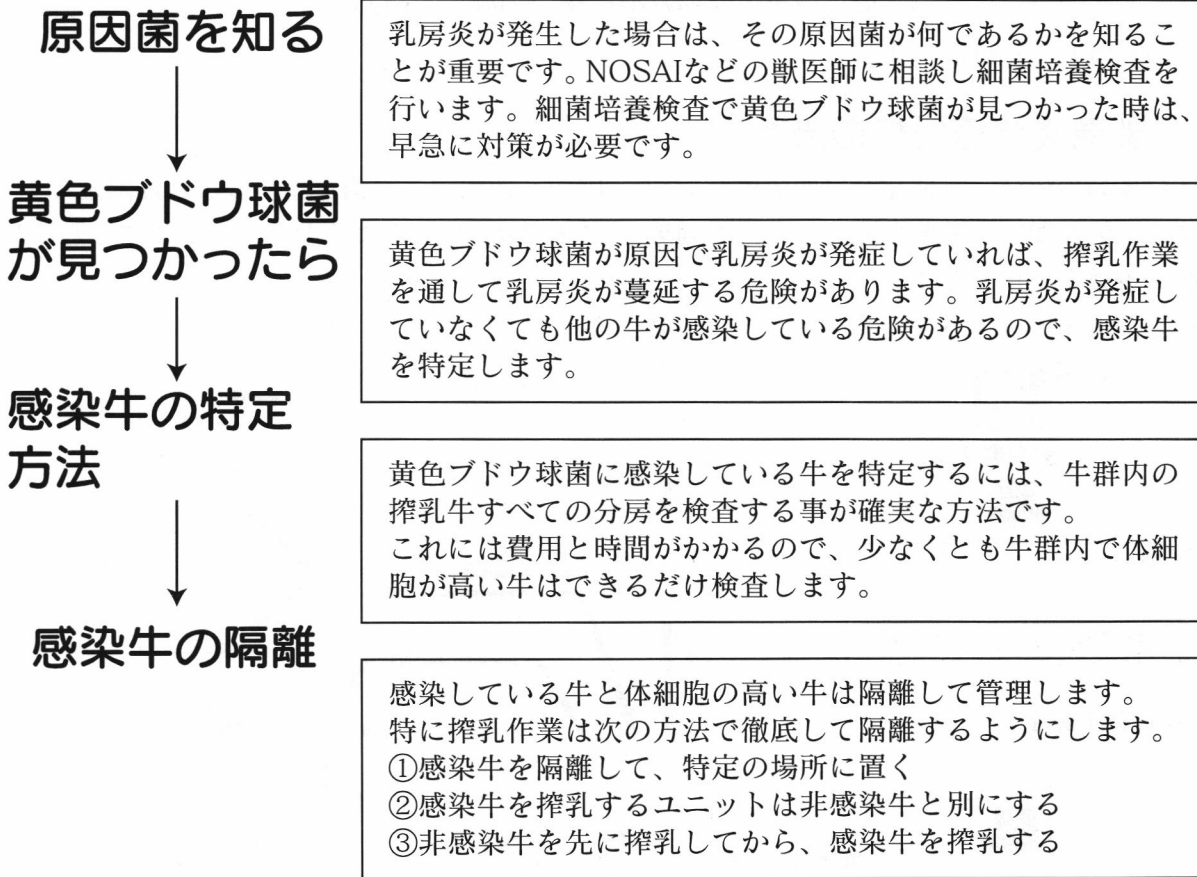
3. 牛群内にこんなことがあったら要注意です

～黄色ブドウ球菌牛群の特徴～

黄色ブドウ球菌に感染している牛群には次のような特徴があります。心当たりがあれば要注意です。

- ◎牛群の中に数頭慢性型の乳房炎で直らない牛がいる
(感染した乳区は一定の間隔で発症し、その間隔は2週間から1ヶ月ぐらいの場合が多い)
- ◎バルクの体細胞が年間30万/ml以上と高い
- ◎感染した分房の乳腺組織にしこりやくぼみ状の部分がある
- ◎外部から搾乳牛を購入したあとに慢性的な乳房炎が増えた

4. 黄色ブドウ球菌をやっつけよう



搾乳作業の確認とミルカーの点検

黄色ブドウ球菌は伝染性の乳房炎なので不適切な搾乳作業やミルカーの不備によって牛群内に蔓延してしまいます。搾乳作業は特に基本を守り慎重に行います。ミルカーにも不備がないかメーカーなどに依頼し点検してもらいます。

搾乳牛・初妊牛導入

搾乳牛の導入はこの期間は控えます。黄色ブドウ球菌の対策を進めているときに、外部からその他の原因菌を持ち込むことはしないようにします。また、初妊牛も既に黄色ブドウ球菌などに感染している場合もあるので、分娩後細菌の培養検査を行い、黄色ブドウ球菌に感染していないことが分かってから搾乳牛と同じ管理をします。これは、自家育成の初産牛も同じです。

感染牛の淘汰

黄色ブドウ球菌による乳房炎の抗生物質による治癒率は10～30%という報告もあります。治療しても再発を繰り返す牛や体細胞が高く継続する場合は淘汰する事も検討します。